

大学新入生の心理学知識 — 北陸学院大学人間総合学部の場合 —[†]

Misconceptions about Modern Psychology among First-year University Students in Hokuriku Gakuin University

木 島 恒 一^{*1} 野 瀬 出^{*2} 山 下 雅 子^{*3}

要旨

心理学についての教育を受けていなくても、人は自らの個人的経験を通じて「人の心」についての信念を作り上げている。このような人間の心の働きについての知識体系は「常識心理学」と呼ばれる。しかしそれらは一般性の乏しい、またエビデンスを欠く主観的信念であることが多く、必ずしも科学的心理学の知見と一致するわけではない。本研究では、「常識心理学クイズ」と題する心理学知識に関する正誤問題を用いて、北陸学院大学新入生にどの程度正しい知識（あるいは誤った知識）が浸透しているかを、首都圏にあるA大学新入生との比較をとおして検討した。その結果、両大学とも、新入生の平均正答数は全40問の半分にも満たず、誤った心理学的信念・知識を有する者が多いことが示唆された。心理学の領域別にみると、臨床心理、性格・知能、社会心理、記憶、生理心理での誤答率が高いことが示された。また、心理学の定義に関する項目でも誤答率が高く、心理学についてのイメージそのものが現代心理学から離れたものであることが示唆された。

キーワード：常識心理学／心理学知識／大学新入生

目 的

欧米諸国の中には、日本の高等学校（以下、高校と略す）に当たる教育課程で「心理学」という科目が設けられている国もある。しかし、日本では高校までは「心理学」の授業がなく、「倫理」や「生物」「保健体育」などの教科で分散して心理学の内容が部分的に取り上げられているにとどまる。しかも、2009年度に高校で使用されたすべての「倫理」教科書を調べた高橋・仁平（2010）によれば、そこでの心理学に関連する記述には明

らかな間違いや誤解を招く表現が多いという（その理由として、高橋・仁平は、「倫理」教科書の執筆者に心理学者が入っていないことを指摘する）。高校では「倫理」は必修科目ではなく、多くの大学生は大学に入学して初めて正規の科目として「心理学」を学ぶことになる。仮に「倫理」を選択履修したとしても、誤った知識が形成されてしまう危険が否定できない。

さて、心理学についての教育を受けていなくても、人は、自らの個人的な経験（家族や友人による影響、マスメディアからの情報、インターネットによる検索など）を通じて人の心についての信念を作り上げている。このような人間の心の働きについての知識体系は「常識心理学（common-sense psychology）」（Kelley, 1992）、「通俗心理学（popular psychology）」（Lilienfeld, Lynn, Ruscio, & Beyerstein, 2010）、あるいは「世間一般の心理学（lay psychology）」（福田, 1987）と呼ばれる。心理学

[†] 本研究は「2009年度・2010年度 北陸学院大学及び北陸学院大学短期大学部共同研究費」より助成を受けた。ここに記して謝意を表する。

^{*1} KIJIMA, Tsunekazu
北陸学院大学 人間総合学部 社会福祉学科
心理学概論Ⅰ・心理学概論Ⅱ

^{*2} NOSE, Izuru
日本獣医生命科学大学 比較発達心理学教室

^{*3} YAMASHITA, Masako
東京有明医療大学 看護学部 看護学科

についてのマスメディアの取り上げ方が、面白さに焦点を絞った興味本位のものであることから推察されるように、「常識心理学」は一般性に乏しい、またエビデンスを欠いた主観的信念であることが多く、科学的心理学からみて妥当とはいえないものが少なくない。

大学において「心理学」あるいは「心理学概論」を講義する上で、受講学生がどのような誤った心理学知識 (misconceptions) を抱いているかを把握することは重要なことであろう。誤った心理学知識を捉えるためのクイズ形式のテストは、これまでも幾つか作成されている (例えば、福田, 1987; Holley & Buxton, 1950; 丹治・木島・山下・飯澤, 2003; Vaughan, 1977)。われわれはこれまでに、丹治他 (2003) が作成した「常識心理学テスト」と称する現代心理学に関する正誤問題を、担当する「心理学」ないし「心理学概論」の初回授業で施行してきた。このクイズ実施の主目的は、受講生の「心理学」講義への興味と授業参加への動機づけを高めることであるが、同時に心理学教育前の大学生たちが持つ現代心理学に関する知識についても大まかにとらえることができる。

これまでわれわれは「心理学」履修前の大学生の心理学知識について検討し、多くの大学生が心理学について誤った信念・知識を有していること、専攻が文系の場合は理系よりも誤答がやや少ない傾向にあること、社会人経験のある大学生では大学新生に比較して誤答が少ないが、社会人経験によっても修正されない種類の誤った信念・知識があること、などを明らかにしてきた (丹治他, 2003; 丹治・木島・山下・野瀬・岡部・市原, 2006; 丹治・山下・木島・飯澤, 2005)。本研究では、筆者のひとりである木島が担当する北陸学院大学人間総合学部の新入生について、彼らが有する心理学知識を探索的に概観することとした。また、そこでみられる特徴が北陸学院大学人間総合学部新生に特有のものであるのかを検討するために、首都圏にある A 大学新生との比較検討を行った。

方 法

1. 「常識心理学クイズ」の構成

丹治他 (2003) の「常識心理学クイズ」は、心

理学に関連する 40 問の短文 (例えば「心理学とは、フロイトの創始した精神分析学とほぼ同じものである」) の正誤を○×形式で問う形式となっている (正解はすべて×)。さらに各問について、自分の解答を正しいと思うかどうかを「はい/いいえ」の形式で回答させた。40 問の短文は、McKeachie (1960)、Vaughan (1977)、稲葉 (1991) などが作成した短文と、丹治が任意に作成した短文から構成されている。このクイズ実施の主たる目的は、前述のように、受講生に心理学の授業に対する興味を抱かせ、授業への参加の動機づけを高めることにある。そのため、ここで使用している短文の中には、その表現に厳密さを欠くものや、厳密にみれば論争中のテーマも含まれている。また、40 の短文はすべての心理学の領域をカバーしておらず、また短文の数は各領域で必ずしも同数とはなっていないことも、あらかじめ記しておきたい。使用している 40 問全文は、結果の表 2 に示すとおりである。

2. 調査対象者および実施時期

(1) 北陸学院大学人間総合学部新入生

北陸学院大学人間総合学部の対象者は 2010 年度新入生 (編入 3 年生を除く) の内、木島の担当する「心理学概論 I」第 1 回目講義に出席した 71 名であり、2010 年 4 月 12 日に調査を実施した。以下の分析では、このうち、解答漏れのあった 5 名を除く 66 名 (男性 15 名 18.27 ± 0.59 歳、女性 51 名 18.10 ± 0.46 歳) を対象とした。

(2) A 大学新入生

首都圏にある A 大学の対象者は 2007 年度新入生で、木島の担当する「心理学 I」2 クラスと野瀬の担当する「心理学 I」2 クラスおよび「心理学 (教職)」を履修した 653 名 (男性 463 名 18.24 ± 0.65 歳、女性 190 名 18.23 ± 0.74 歳) であった。学部別にみると、法学部 88 名 (男性 71 名、女性 17 名)、経済学部 264 名 (男性 199 名、女性 65 名)、外国語学部 63 名 (男性 17 名、女性 46 名)、人間科学部 86 名 (男性 30 名、女性 56 名)、工学部 152 名 (男性 146 名、女性 6 名) であった。学部により男女比に偏りがみられた。調査は 2007 年 4 月 18 日と 19 日に実施された。

3. 手続き

(1) 北陸学院大学人間総合学部新入生

「心理学概論Ⅰ」の第1回目講義を始める前に、「常識心理学クイズ」を印刷した用紙を全員に配布し、その後、木島が1項目ずつ読み上げ、受講者は一斉に○か×で解答して、その解答が正解であるかどうかを「はい/いいえ」で回答するというスタイルをとった。全40問の解答および回答が終了した後、その場で正解を発表し、40問の解説プリントを配布して、数項目について詳しく解説した。その後、クイズ用紙を回収した。

(2) A大学新入生

木島および野瀬の担当する「心理学Ⅰ」は履修希望者が多いため、抽選科目となっており、抽選によって履修者が決定されるのは第1回目授業後になる。そこで第1回目の授業では本研究のクイズ内容に触れぬようにして、第2回目授業の冒頭に「常識心理学クイズ」を実施した。以下の手続きは、北陸学院大学の場合と同じである。

4. 結果の処理法

まず、全対象者の正答得点を100点満点換算してその平均値を算出し、本学新入生がどの程度心理学知識を有しているかについて検討した。ついで、本学新入生の間に浸透している誤った知識がどのような内容のものであるかを概観するために、各短文について誤答率の高かった項目、低かった項目について検討した。また、こうした特徴が本学新入生だけのものかどうかを検討するために、首都圏のA大学の結果と比較した。

結 果

1. 北陸学院大学新入生とA大学新入生の正答得点

北陸学院大学新入生およびA大学新入生の基礎統計量は表1に示すとおりである。正答得点の平均値は、100点満点に換算して、北陸学院大学新

表1 北陸学院大学新入生とA大学新入生の正答得点の基礎統計量

	北陸学院大学 (N=66)	A大学 (N=653)
平均正答得点	44.32点	47.08点
標準偏差	8.58点	10.57点
最大値	65点	87.5点
最小値	25点	0点
範囲	40点	87.5点

入生は44.32点、A大学新入生は47.08点であった。すなわち、両大学とも新入生段階では、全体的にみて40問の設問に対して正答は半分に満たず、多くの大学生が心理学について誤った信念を有していることがうかがわれた。比較すると、A大学新入生の方が平均正答得点は高いが、範囲も広いことが示された。両大学新入生の正答得点を統計的に検討したところ、北陸学院大学新入生はA大学新入生より有意に正答得点の低いことが示唆された (Welch の法: $t(86)=2.44, p<0.05$)。

2. 40の短文の誤答率についての北陸学院大学新入生とA大学新入生の比較

表2に、北陸学院大学新入生の誤答率の高かった順に短文を示した。また、同短文に対するA大学新入生の誤答率を並列で示した。表中、短文末の【**】は短文内容が含まれる心理学領域を示している。この領域同定は丹治ら(2003)によった。なお、表中の点線は、北陸学院大学新入生の誤答率の高かった上位10項目および誤答率の低かった下位10項目の境界を示す。北陸学院大学新入生の誤答率上位10項目のうち8項目は、A大学新入生の誤答率上位10項目と重なっていた。また、同じく誤答率下位10項目のうち8項目は両大学新入生で共通していることが示された。

表2 北陸学院大学新入生とA大学新入生の各短文に対する誤答率の比較

項目番号	質問短文	北陸学院大学 (N=66)	A大学 (N=653)
(33)	子供は大人よりずっと容易に暗記することができる。 【記憶】……………	93.9% (1位)	85.3% (3位)

(21)	罪もない人に『450 Vの電気ショック(100 Vで人が死ぬこともある)を送れ』という命令には、多くの人は従わないであろう。 【社会心理】	90.9% (2位)	85.8% (2位)
(27)	人が夜8時間眠ったとすると、その時間の2/3ほどは夢を見ているが、朝目覚めると同時に一部の内容を残してそのほとんどを忘れてしまう。【生理心理】	89.4% (3位)	78.4% (8位)
(12)	記憶は脳内の貯蔵庫になぞらえられる。我々は資料をその中に蓄え、そして必要な時にそこから引き出すことができる。場合によってはその『金庫』から何かが紛失することがあり、それが忘却である。【記憶】	86.4% (4位)	81.3% (6位)
(31)	臨床心理学者として開業するためには、日本では厚生労働省の実施する国家試験に合格しなければならない。【臨床心理】	86.4% (4位)	85.3% (3位)
(6)	目の見えない人は、目の見える人とは異なった鋭敏な触感覚を持っている。【感覚・知覚】	84.8% (6位)	88.4% (1位)
(37)	睡眠は人間の生存に必要な不可欠のものであり、一日20分程度の睡眠で何か月も生活することは不可能である。【生理心理】	84.8% (6位)	77.9% (9位)
(24)	精神科医は精神分析を用いる医師として規定されている。【臨床心理】	81.8% (8位)	71.5% (11位)
(4)	赤ん坊にとって幸福なことに、人間の女性は元来強い母性本能を持っている。【発達心理】	78.8% (9位)	80.1% (7位)
(3)	『心の研究』という言葉は、心理学を定義した最も良い短い定義である。【心理学全般】	74.2% (10位)	65.1% (14位)
<hr/>			
(1)	生理学者は肉体を研究する。心理学者は心を研究する。【心理学全般】	72.7% (11位)	62.2% (15位)
(26)	訓練された精神科医や心理学者は、正常な人間が精神病患者を装っても数回の面接を行えばそれを簡単に見破ってしまう。【臨床心理】	69.7% (12位)	82.7% (5位)
(20)	何か助けが必要なとき、周囲に一人しか他人がいない場合よりも、沢山の他人がいたほうが援助される可能性は高くなる。【社会心理】	68.2% (13位)	43.8% (26位)
(13)	天才と狂気は紙一重である。【性格・知能】	66.7% (14位)	75.5% (10位)
(11)	人間の脳の記憶情報の貯蔵量は、約五千万項目程度と言われている。【記憶】	65.2% (15位)	47.8% (23位)
(15)	より強く動機づけられるほど、複雑な問題を巧みに解決できるだろう。【動機づけ】	63.6% (16位)	69.4% (12位)
(25)	催眠下では、それまで決してできなかったような力技(ちからわざ)を行うことができる。【臨床心理】	62.1% (17位)	61.6% (16位)
(16)	血液型(A・B・AB・O)と性格の間にはある種の関連があり、このことは心理学的に実証されたと言ってよい。【性格・知能】	59.1% (18位)	52.2% (22位)
(10)	心理学は、フロイトの創始した精神分析学とほぼ同じものである。【心理学全般】	57.6% (19位)	52.7% (21位)
(23)	単純でつまらないアルバイトをした後、高いバイト料を貰った人のほうが、安いバイト料を貰った人よりもその作業を高く評価する。【社会心理】	57.6% (19位)	60.9% (17位)
(39)	子供の知能指数と学業成績とはほとんど関連しない。		

	【性格・知能】	56.1% (21位)	65.5% (13位)
(29)	睡眠中に生じる『金縛り現象』は、心理学では超常現象の一つとして研究されている。【超心理】	53.0% (22位)	45.2% (25位)
(2)	心理学は一つに体系化された科学である。【心理学全般】	51.5% (23位)	40.7% (28位)
(5)	多分、人間の闘争本能が戦争の根本的な原因なのであろう。【社会心理】	48.5% (24位)	38.0% (31位)
(35)	最近の睡眠科学の進歩は目覚ましく、睡眠中に測定される脳波や他の生理反応を分析することによって、夢の内容のかなりの部分がわかるようになってきている。【生理心理】	48.5% (24位)	36.3% (32位)
(28)	念動(サイコキネシス)や未来予知に関してはまだ不明の部分があるが、テレパシーに関しては程度の差はあれ、人間に生物学的に備わっている能力であり、訓練次第でその能力を伸ばすことができることが科学的に明らかにされている。【超心理】	45.5% (26位)	30.8% (34位)
(30)	教師の生徒に対する期待と、その生徒の学力とは無関係である。【教育心理】	43.9% (27位)	58.0% (19位)
(34)	個人である決定を下すよりは、集団で討議して決定を下すほうが、過激な結論になりにくい。【社会心理】	43.9% (27位)	58.2% (18位)
(38)	人の大脳は右脳と左脳に分かれてある程度の機能分担をしているが、片方の脳だけ起きていて、もう片方の脳は眠ってしまうなどということはあり得ない。【生理心理】	43.9% (27位)	41.5% (27位)
(40)	幻覚や夢、あるいは病的な状態にある場合を除いて、正常な心理状態下では物理的に存在しないものは眼には見えない。【感覚・知覚】	43.9% (27位)	53.4% (20位)
(18)	平均的な赤ん坊に適切な訓練を行えば、普通より2か月はやく歩けるようになる。【発達心理】	42.4% (31位)	38.9% (30位)
(7)	人間の視知覚機能は、光学機械などとは比べようもなく精緻であることが実験的に明らかにされており、可視範囲であれば極めて正確に外界をとらえることができる。【感覚・知覚】	40.9% (32位)	45.8% (24位)
(22)	我々はある事柄についてまず『意見』を持ち、次に『態度』を形成し、それに従って『行動』するのが普通であり、その逆はあり得ない。【社会心理】	34.8% (33位)	16.8% (36位)
(9)	子供に何かを学ばせる場合、できた時に報酬を与えることと、できなかった時に罰を与えることは、子供の学習に同じくらいの効果がある。【学習心理】	24.2% (34位)	40.0% (29位)
(19)	統合失調症(精神分裂病)とは性格の分裂した人のことをいう。【臨床心理】	24.2% (34位)	33.1% (33位)
(8)	現実の場面ではなく、テレビなどで凶暴なシーンを見るだけでは、子供にあまりわるい影響を与えない。【学習心理】	19.7% (36位)	11.3% (39位)
(32)	心理学を学ぶと他人の心が容易にわかるようになる。【心理学全般】	19.7% (36位)	12.6% (37位)
(36)	上下が逆さに見えるメガネを長期間かけ続けても、我々が知覚する外界は逆転したままであるが、日常行動は逆転メガネをかける前とほぼ同じ程度にスムーズになる。【感覚・知覚】	19.7% (36位)	23.7% (35位)
(17)	子供は善悪の感覚を持って生まれてくる。【発達心理】	15.2% (39位)	11.5% (38位)
(14)	知能検査は人間の知能を正確にはかることができる。【性格・知能】	13.6% (40位)	7.5% (40位)

表3 心理学領域別にみた誤答率50%以上の項目数

心理学領域	北陸学院大学 (N=66)	A大学 (N=653)
心理学全般 (全5項目)	4	3
感覚・知覚 (全4項目)	1	2
記憶 (全3項目)	3	2
生理心理 (全4項目)	2	2
学習心理 (全2項目)	0	0
動機づけ (全1項目)	1	1
教育心理 (全1項目)	0	1
性格・知能 (全4項目)	3	3
発達心理 (全3項目)	1	1
社会心理 (全6項目)	3	3
臨床心理 (全5項目)	4	4
超心理 (全2項目)	1	0

誤答率50%以上の項目数は、北陸学院大学新生では23項目、A大学のそれは22項目であった。これを心理学領域別にみたものを表3に示す。両大学の傾向はほぼ同じで、臨床心理学(全5項目)が4項目、性格・知能(全4項目)が3項目と多いことが注目される。また、心理学全般、社会心理、記憶、生理心理でも誤答率50%を超えた項目が多かった。

次に、表2に示した正答率の特徴が北陸学院大学新生だけにみられるものか否かを検討するために、40の短文の誤答率についての北陸学院大学新生とA大学新生の相関を見た結果、Spearmanの順位相関係数は0.896で、有意な正の相関が認められた($p<0.001$)。このことから、正答得点は北陸学院大学新生の方が低いが、誤答されやすい短文、正しく認識されている短文は両大学の新生とも共通しているといえよう。

考 察

1. 大学新生の持つ心理学知識

心理学についての教育を受けていなくても、人は自らの個人的な経験を通じて人の心についての信念を作り上げている。それらは「常識心理学」あるいは「通俗心理学」と呼ばれるが、その内容は誤ったものであることが少なくなく、しかもその内容に強い確信をもっている場合もみられる(野瀬・木島・山下, 2009)。Lilienfeld et al. (2010)はそうした誤った心理学的信念・知識を「心理学的神話(psychological myths)」と呼び、

それらが形成される原因として、(1)家族や友人、知人との言語的コミュニケーション、(2)選択的知覚・記憶、(3)マスメディアによる誤情報などを挙げている。また、日本の高校の「倫理」の教科書では心理学に関連する事項が取り上げられているが、高橋・仁平(2010)によれば、精神分析学派への偏重がみられ、反証可能性のあるエビデンスを持った心理学概念や事実の記載がないといった特徴があり、しかもそれらの記述には「明らかに誤った記述」、「心理学の常識からかけ離れた記述」、「誤解を招く記述」が少なくない、という。

こうしたことを考慮すると、大学で「心理学」の講義をする上では、学生がどの程度正しい知識を持ち、どのような内容の誤った知識を有しているかを把握しておくことは重要であろう。本研究では、丹治他(2003)が作成した「常識心理学クイズ」を用いて北陸学院大学新生が有する心理学知識を明らかにし、その特徴が北陸学院大学新生に特有のものであるかを、首都圏にあるA大学新生のそれとの比較をとおして検討した。

正答数を100点満点に換算すると、両大学ともその新生の平均正答得点はそれぞれ44.32点、47.08点と、中間の50点を下回っており、丹治らの研究(丹治他, 2003; 丹治他, 2005; 丹治他, 2006)が示唆するところと同じく、現代心理学について誤った信念・知識を持つ新生が多いことが示唆された。平均正答得点についての両大学の比較では、北陸学院大学新生の方が有意に低かった($t(86)=2.44, p<0.05$)が、その差は顕著

なものではなかった。

40項目の誤答率についての両大学新入生のSpearmanの順位相関をみたところ、有意な正の相関が認められた($r_s=0.896$, $p<0.001$)。また、誤答率上位10項目、下位10項目ともに、両大学で重複しているものが各8項目みられた。このことから、両大学新入生に浸透している心理学知識には、大学間で特に大きな相違はなく、ほぼ同じような項目で同じような誤答傾向を示していたといえよう。

2. 誤って抱かれている心理学知識

心理学領域別にみた誤答率50%以上の項目数は、表3に示すとおりである。心理学全般5項目のうち、北陸学院大学新入生で誤答率50%以上の4項目(項目1、2、3、10)はいずれも心理学の定義に関する短文であり、A大学新入生でも3項目(項目1、3、10)は誤答率50%を超えていた。福田(1987)は本研究と同種のテストを行った研究で、本研究と同じく、大学新入生が心理学の定義に関する項目で高い誤答率を示すことを報告している。このことは、対象学生たちが心理学について基本的に誤ったイメージを有していることを示唆するものであろう。

個々の領域についてみると、結果でも述べたように、両大学新入生とも、臨床心理学(全5項目)が4項目、性格・知能(全4項目)が3項目と多いことが注目される。近年、臨床心理のテーマはマスコミでもしばしば取り上げられ、これに関心を持つ人も少なくない。しかしながら、少なくとも大学生においては、臨床心理についての正確な知識は残念ながら十分には普及しておらず、むしろ誤った信念を抱いている者が多いことが示唆された。例えば、項目31「臨床心理学者として開業するためには、日本では厚生労働省の実施する国家試験に合格しなければならない」は、資格という基本的レベルの知識を扱った短文であるが、その誤答率は北陸学院大学が86.4%、A大学が85.3%とかなり高い(現段階では、臨床心理士は国家資格ではない)。項目26「訓練された精神科医や心理学者は、正常な人間が精神病を装っても数回の面接を行えばそれを簡単に見破ってしまう」での高い誤答率(69.7%と82.7%)も、臨床

心理のテーマについてのマスメディアの不正確な情報がその一因であることが考えられる。性格・知能の領域では、血液型と性格の関連性に関する短文(項目16)の誤答率が、北陸学院大学新入生で59.1%、A大学新入生で52.2%と高く、科学的妥当性が認められないにもかかわらず血液型性格判断を信じる大学新入生の多いことが示された。なお、血液型性格判断の項目は日本で作成されたテスト(丹治他(2003)の常識心理学クイズと福田(1987)のShort Test of Common Beliefs)のみに設けられているもので、欧米圏で作成されたテストには存在しない。(日本での血液型性格判断の流行に関心を持った欧米圏の学者による研究(Cramer & Imai, 2002; Rogers & Glendon, 2003)もあるが、いずれも血液型性格判断に対して否定的な結果を報告している)。この他に両大学新入生で誤答率の高い領域としては記憶、生理心理、社会心理が挙げられる。

上にみてきた心理学についての誤った知識は、日本の大学新入生のみには特有のものではない。Lilienfeld et al. (2010)は、心理学的現象は日常の至る所で見受けられるものであるにも係わらず、世間一般に流布している通俗心理学(popular psychology)は「心理学的神話」というべき誤った知識に満ちていると述べた上で、「粉砕する(shatter)」べき「心理学的神話」を50挙げている。

3. 今後の課題

本研究で用いた丹治他(2003)のクイズは、受講生に心理学の授業に対する興味を抱かせ、授業への参加の動機づけを高める目的で作成されたものである。そのため、そこで使用している短文の中には、その表現に厳密さを欠くものや、厳密にみれば論争中のテーマも含まれている。また、40の短文はすべての心理学の領域をカバーしておらず、また短文の数は各領域で必ずしも同数とはなっていない。こうした問題は、心理学の誤った知識についての他のテスト(Vaughan(1977)のTest of Common Beliefs(TCB)など)にも認められるものである。今後は、さらに項目を吟味検討する必要がある。

また、本研究では対象者の解答を○か×で求めたが、福田(1997)が指摘するように、このよう

な強制選択法では偶然の判断を回避できない。そのためわれわれは調査にあたって、各問について自分の解答を正しいと思うかどうかを「はい/いいえ」の形式で回答させた。本研究では自身の解答への確信度については扱わなかったが、木島・野瀬・山下(2008)はA大学新入生の解答の正誤と自身の解答への確信度について次のように報告している。すなわち、臨床心理と社会心理、感覚・知覚、記憶では、誤答率50%以上の全項目で、誤った自分の解答を「正しい」と確信している者が多く、丹治他(2005)で示されている「科学的でない通俗的な表現」で「内容的にもわかりやすく世間受けのする」ものや数字が文章に含まれた「科学的」な感じのする短文では強い確信を持って誤答する者が多い。今後は北陸学院大学新入生の場合についても同様の傾向が認められるかについて検討する必要がある。

最後に、調査年次の違いについて触れておきたい。今回は北陸学院大学の2010年度新入生とA大学の2007年度新入生を比較した。本来であれば同年入学の学生で比較するべきであるが、A大学については2010年度新入生を対象に調査できなかったため、木島他(2008)による2007年度新入生のデータを用いた。そこで問題となるのは、調査年次によって結果が異なる可能性である。この問題について山下・木島・野瀬(2010)は、A大学の5年間の経年変化を検討した結果、誤答率が中程度の項目では年次により誤答率の変動(標準偏差)が大きくなる傾向が見られるが、誤答率が高い項目と低い項目の両方において、調査年次による変動は小さいことを指摘している。このことから、少なくとも誤答率の高い項目群と低い項目群に関しては、本研究における両大学の比較は妥当性のあるものと考えられる。

(謝辞 本研究の実施に当たり、文教大学の故丹治哲雄教授からの貴重なご意見を参考とさせていただきましたことに深謝申し上げます。)

<引用文献>

- 1) Cramer, K. M., & Imai, E. (2002). Personality, blood type, and the five-factor model. *Personality and Individual Differences*, 32, 621-626.
- 2) 福田幸男(1987). 一般教育の心理学受講生の misconceptions 横浜国立大学教育学部教育実践指導センター紀要, 3, 25-34.
- 3) 福田幸男(1997). 教養教育の心理学受講生の misconceptions (3) 横浜国立大学教育紀要, 37, 215-228.
- 4) Holley, J., & Buxton, C. (1950). A factorial study of beliefs. *Educational and Psychological Measurement*, 10, 400-410.
- 5) 稲葉智子(1991). 大学生の心理学知識に関する調査研究 1990年度文教大学人間科学部卒業論文(未公刊).
- 6) Kelley, H. H. (1992). Common-sense psychology and scientific psychology. *Annual Review of Psychology*, 43, 1-23.
- 7) 木島恒一・野瀬 出・山下雅子(2008). 大学新入生の「心理学」知識—自分の「心理学」知識に対する確信度と知識の正誤— 日本心理学会第72回大会発表論文集, 1312.
- 8) Lilienfeld, S. O., Lynn, S. J., Ruscio, J., & Beyerstein, B. L. (2010). *50 Great Myths of Popular Psychology: Shattering Widespread Misconceptions about Human Behavior*. Chichester: Wiley-Brackwell.
- 9) McKeachie, W. J. (1960). Changes in scores on the Northwestern Misconceptions Test in six elementary psychological courses. *Journal of Educational Psychology*, 51, 240-244.
- 10) 野瀬 出・木島恒一・山下雅子(2009). 大学新入生の持つ心理学知識—正答率および確信率の学部間比較— 日本心理学会第73回大会発表論文集, 1280.
- 11) Rogers, M., & Glendon, A. I. (2003). Blood type and personality. *Personality and Individual Differences*, 34, 1099-1112.
- 12) 丹治哲雄・木島恒一・山下雅子・飯澤未来(2003). 大学新入生の心理学知識Ⅰ—人間科学部人間科学科新入生の場合— 教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), 12, 85-92.
- 13) 丹治哲雄・木島恒一・山下雅子・野瀬 出・岡部康成・市原 信(2006). 大学新入生の心理学知識Ⅲ—人間科学部新入生と法学部・経済学部新入生との比較— 教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), 15, 101-110.
- 14) 丹治哲雄・山下雅子・木島恒一・飯澤未来(2005). 大学新入生の心理学知識Ⅱ—人間科学部人間科学科新入生と理工学部新入生との比較— 教育研究所紀要(文教大学付属教育研究所), 14, 95-103.
- 15) 高橋美保・仁平義明(2010). 心理学は高校「倫理」の中でどのように扱われているか 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1169.
- 16) Vaughan, E. D. (1977). Misconceptions about psychology among introductory psychology students. *Teaching of Psychology*, 4, 138-141.
- 17) 山下雅子・木島恒一・野瀬 出(2010). 大学新入生の心理学知識—正答率の経年変化— 日本心理学会第74回大会発表論文集, 1172.